

# 学生戦線は結集せよ！ 突破口の再占拠を闘争奪還の實力を

學友諸君、敵軍力の側からは中教審答申として示され、我々の側からは、残念ながら相対的なる成長として示される。全日学闘争の現局面は如何。この現局面の性格を分析し、策謀斗争の基本方向を確定するに當つて、我々はまずこの向の「東大、教大入試中止決定」東大迎田記壇攻政成、諸學団における格別「敵軍」の「敵軍」の諸學団斗争の一切を凝縮しつつ進行した一連の諸事象、諸斗争の線路から始めなければならぬ。

(一) 敵軍力の「崩壊」を革命闘争の契機と  
我々の斗いが明らかにしたものは何か。  
さうまでもなくそれは、「教育の府内主義的再編に反対する」とことを共通の本質とする個別學団斗争の現在の展開が、日帝軍力の現局面に類是されつつ、比喩的なる個別改良斗争のごまかりないという構造的な事象である。上からの入試中止決定、迎田記壇、各學団にたいする格別隊ド入、中教審答申、という極端的なコースの展開のなかで敵軍力からこの事象を知らされ、二段階改良主義者軍マル派は、身や一切の展望をどう失し、個別斗争にたいする「教育政治斗争」の増水を、屢次組織論的（リ主体的）にではなく、「階級分析」の次えにおいて（リ階級主義的に）行うのみの、敵軍力にとっては無言を我々にこつては自國を炎入への展望を深めてはいる。

再慶の「日帝市場を奪取」の登場で、日米及軍部軍部同盟内部の「ゲモノ」戦という形態をもつて、劇体的には、併竹者四軍部、後進諸凶人の優勢及軍部軍部斗争の準備として、これに照応する以内体制の強制的再編として、現存もんとする日本軍部主義マルジョアジの基本動向が成るの「史的過程」において階級斗争の契機を形成してきた教育學団の場において端緒的に、しかし最も鋭利に反映していることと我々はまずおさえておかねばならぬ。このような流れを背景に描えながら敵軍力の大本営にたいする攻撃が展開している以上、硬言すれば、大学の再編が、日内支脱脱の全面的な再編（再編）の環として野望をいっている以上、個別學団における矛盾の突進にたいする斗いの提起を、自己完結的な改良斗争としてしかなしえない線が、学生大衆の膨大な

自然発生性に着えさしめ代ものどしかなしことは理の當然なのだ。

この向の政府文部省の「入試中止」東大「現目確認」の否認、中教審答申と、そしてなによりも我々の迎田記壇攻政成が白日のもとにのしちたその事象は、或は民主主義というものがオロギーに支えられたい成行戦政政理過程の文部「民主的」諸制度、諸運動が肉死の標本を求め、階級関係の流動化と再編が、まさに、ファッシズム派、人民戦線派、プロ激派という方向への分解として開始されつつあるということである。「大学破壊」（中核派）や「既存の大学」が諸君は、「既存秩序の破壊」が右からの上から、我々の斗いに對する暴力的圧殺を媒介として進行しつつある事態をはつきりと見ておかねばならないのだ。我々が「大学解体」と言うとき、それは敵軍力の攻を前にして小ブル的対応を固定化する人民戦線派を解体する思想的宣伝の武器としてあるのであり、その際前提的にふまえておかねばならないのは大学内部の階級関係の正当な分析と、そしてなによりも至人民的政治斗争の戦略的提起である。

(二) 學団斗争の現段階的到達点と教育大斗争の位置  
全日学闘争の現段階的到達点は進んで西暦マルジョアジの中教審答申に代表される排外主義イデオロギーと暴力をもつての學団直轄支配の攻撃の全面化、「民主主義」に學問的自由の敬階級の脱ぎすてた外被を武器とした人民戦線プロククの抵抗と挫折、その子防反革命としての登場等として集約される。それ故これら全体に對する実践的批判が、個別斗争の進展過程を、七五軍部派、沖繩斗争への目的意識的結局、転化として把え直すこととして要請されているのだ。

教育大における一昨年来の三輪、三輪、官憲と続く移動推進ラインの動向は、そのまじり政府文部省の大学再編の軌跡であり、かつその先取りであった。文部官像と無限に二着し、理には警察初力と緊通することによって自らの野望の實現を企ててきた彼等と、全学斗争運動に對する卑劣な弾圧に對して、それなりのより一刃の刃ある階級的憎悪のバネでしかなしなことを

今日の断固たる実力斗争の展開をもつてなげ返して  
おかぬばならない。

我々は正当な大衆的憤激を一形とごすますとも  
に次のことをおさえておかねばならないだろう。即  
ち、彼等の移転の形態と方法そのものな「移転」  
の内容を規定していること、換言すれば現在の移  
転過程が将来的な「筑波新大」の理想の内容を  
形取しつつあること。この向の過程が赤裸々に示  
した管理運営の大学上層部力への一元化、中央集  
約化、目的別再編と産学協同に向けての「大胆な」  
理想、ボツダム自治会の非合法化をも意図した学生  
運動に対する極限的な抑圧、これら一切のなかで自  
身の規模を政策として遂行されようとしているの  
だ。このような政府支配者階級の大学を根本的に改  
編し全面的に自らの下に包摂せんとする策動に對し  
て、こは一体我々の斗いは如何なる方向と質を要求  
されているのか？

(三) 日帝の帝国主義的の大学再編の脱躍的強化に中教  
審答申粉砕ノ学園実力奪還を通じ七〇年斗争の  
根拠地を構築せよ！

「学園」における暴力の支配を前にして「六二〇」自編撤  
回」という但別課題の実現するが著しく困難性を拡大し、学生大衆の分解と拡散が進行している。この  
困難な局面の中で主として「六二〇」決定撤回」とい  
う狭い領域からの展望ではなく、まさに全人民的政治的立場に普遍的立場に立脚した斗いの方向付けが  
求められているのだ。我々はこの方向を現在の諸学  
闘争と安保斗争を環とする七〇年代階級斗争  
の総合一線の内実として捉えなければならぬ。  
しかもその内実には、「大学占拠から回松へ」とい  
う空虚な「言葉」としてあるのではなく、目的意  
義的斗争闘争の駆使と組織方針に媒介された斗争  
斗(至其闘)の斗争類型組織への発展転化(実体的  
には反帝統一戦線の強固な形成)としてのみ表現さ  
れるのだ。中教審答申を頂点とする政治ブルジョア  
シの現状への政策的遂行に全面的な対決をなしと  
げていく中から地区反戦と結合した至学共闘運動  
の強化をまさに学内諸階級統合の環にコミュー  
ン型組織への改編として実現し、これを軸として学  
園と地域を七〇年代階級斗争の根拠地として構築し  
ていく方向こそ但別斗争の発展の政策的內容なので  
ある。こうした全体的な政治的方向性こそ斗争に欠  
落しを結果として現在の多くの学生が至学斗に欠  
けられあることを思い返さねばならぬ。従っ  
て我々は来る4月11日予定されている学園実力奪  
還の斗いを4・26く28の安保斗争の質から逆規  
定するとも、同時にロックアウト解除後の斗い  
に直線的に結合する斗いとして構定し、3・14奪還斗

争を上まわる規模と質をもって勝ちとていかねば  
ならない。ロックアウト解除後の斗いを保障するも  
のごと、まさに現在の時点における実力斗争の断片  
たる継続とその周囲に多くの学生を組織化する斗い  
である。

スローガン

日帝の帝国主義的の大学再編の脱躍的強化

中教審答申粉砕！

大学院大学化理想粉砕！

学園を七〇年安保斗争の拠点として

奪還せよ！

4・26-28 安保斗争を闘うぞ！

筑波斗争を安保斗争への脱躍の場とせよ！

4月全共闘全口評談会結成を勝ちとれ！